

ペットの清潔の問題で悩んでいませんか？

真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

年末のテレビで、広島のカンパニーパークに放置された犬たちが映されていました。

長い間食料が与えられず、痩せこけて餓死寸前の犬や、皮膚病などの病気にかかり重体の犬、片目を失ってしまった犬などが映り、あまりの悲惨さに思わず絶句したものです。

ところが、檻の前に人間が近づくと、犬たちは寄ってきて、尻尾を振り、優しい訴えるような目で見つめています。人間が手を差し出すと、骨と皮だけの体を嬉しそうに擦り寄せてきます。

動物に対して、これほどの罪悪感を感じたことはかつてありませんでした。犬たちが穏やかな表情を見せていればいるほど、人間の業の深さを思わずにはいらなかったのです。

そして、この時ほど、犬を可愛い動物だと思ったこともありませんでした。

もちろん、子供の頃から犬が嫌いだったわけではありませんから、これまでも何度その仕草に見とれたか分かりません。とりわけ、コロコロ肥った小犬の動作には目がなくて、いつまで眺めていても厭きなかったものです。

しかし、それはたいてい、健康で活気に満ちた犬ばかりで、今回のように、病的に痩せこけ、うす汚れた犬を見て、何とも言えない「可愛らしさ」を感じたのは初めてでした。

それは、「苦しさ」の入り混じった、罪業の思いとは紙一重の愛情と言ったら良いのでしょうか。犬をペットにして癒され救われる人々の気持ちが分かるような気がしたものです。

飼い主を選ばず、何をされても恨まず、憎まず、時には暴力にさえ耐えている犬たちを見ると、人間が好んでこの動物をペットにする秘密が見えてくるような気がします。

これほど安く、これほど無条件に、献身や愛情が手に入る相手は、犬以外にはいないからではないでしょうか。それに対して、人間の与えるものは限られています。

いくら犬を抱いて「可愛い、可愛い」と言いまくり、撫で回し、頬擦りをし、口づけをし、献身的に世話をしても、しょせんは身勝手な自己満足に終わってしまうところが人間にはあります。

人間同士でさえ滅多に愛せないのが現実です。人間は愛せないが、ペットは愛せるという論理には矛盾があります。ペットは無害だからと言う人がいますが、たまたま無害だということが、自分の都合に合っているから、そう言えるのでしょう。

しかし、自分の都合に合わなくなったら、どうするのでしょうか。フランスでは、夏のバカンス時になると、高速道路の脇などにドッと捨て犬が増えるのです。そういうことをする人たちが、普段からペットとは一歩距離を置いていたというわけではありません。

日頃ネコっ可愛がりしていた犬を、旅行の邪魔になるからといって、あっさり捨てて行ってしまいます。帰ってきたら、また可愛い「愛せる」犬を見つけたら良いということなのです。

捨てられた犬は、野犬処理場で殺されてしまうか、そうでなければ、アジアの国に輸出されるというのに。

なぜ、こういう話にまで発展してきたのかと言いますと、私は、ペットを愛することと、ペットとの関係を「清潔」に保つということとは別だと考えているからです。

私が犬や猫の不潔・清潔を気にしていると、多くの人々、とりわけ愛犬家や愛猫家には、ウサン臭い目で見られるのがおちです。「動物好きに悪い人はいない」とよく言いますね。その逆の論理で、私はたちまち悪い奴、あるいは少なくともイヤな奴というレッテルを貼られてしまいます。

そこまで行く前に、すでに論理の飛躍があつて、動物の不潔・清潔を気にする人間は、「動物嫌い」とされてしまいます。しかし、私ぐらい犬好きな人間は、探してもそんなにいないはずなのですが。

私の義父もたいへんな犬好きでした。ところが、犬を絶対に家には入れないんです。犬小屋を設けていて、そこまでが限界です。毎日のように愛犬を散歩に連れて行ったり、じゃれ合ったりしているのですが、そのあとは必ず手足を洗い、衣服を替えるといった徹底ぶりで、清潔には気を配っていました。

私は、そういう義父の生活態度を、『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』（ビワコ・エディション版）という本の中で書きました。

これだけで、私はたいへんな誤解を受けることになりました。私自身が「動物を決して部屋に入れない」人間のように書評に書かれたのです。

私はそんなことを言った覚えはありません。ただ、動物を愛することと、その生活領域を守ることとは別だということを、義父の例をあげて言いたかったのです。

動物には動物の生きる領域があります。それを人間の都合に合わせて勝手に改変することは、時には動物にとっても「迷惑だ」とさえ言えるでしょう。

私は、人間の知恵で、動物との共同生活のルール作りをする必要があると考えています。

犬をどうしても部屋に入れなければならない人もいるでしょう。その場合、洋間を人間との共同領域にすることには賛成ですが、和室に、とりわけ畳の上に犬をあげることには反対です。

それも、家族だけの居間なら、家族全員がそれを望むなら、何も反対するいわれは無いでしょう。ただ、お客をそこへ招くことがあるとしたら、動物の生活領域との混同は、お客への非礼ということになります。

何しろ、動物は、用便のあと何の始末もできないというのが、彼らの文化の限界なので、その生活領域は人間が決めてやらなければなりません。

動物の生活の独立性を尊重し、節度を守って共生することこそ、動物を愛することにほかならない、というのが私の考えです。

[2007/01/08 magmag]